

1. はじめに

輪島は能登半島地震と集中豪雨とにより二重災害を受け、今なお(復旧も)復興が進まず、被災者は混乱の中での生活を余儀なくされている。この状況をつぶさに視察して今後に向けて役立たいとの想いを持つ新建富山が全国災害対策連の被災地復興支援事業に参加し、二重被災地における医療現場、住まい復興現場、農業現場、他を視察・懇談した。ここに報告する。

2. 今回の企画の経緯

全国災対連とは「災害被災者支援と災害対策改善を求める全国連絡会」のことであり、阪神淡路大震災を契機に新建を始め民医連、民農連、新婦人など民主的団体が支持母体となって設立された。災対連は、能登地震や能登豪雨の被災地への支援活動に早くから着手し、建築の被害には新建の災対連グループが率先して事に当たっており、特に七浦地区の再生会議とは Zoom で議論を深めるとともに対面での論議が必要として、今回の企画が持ち上がった。また、支援は七浦だけではなく、輪島診療所を始め多くの地域を対象としている。もちろん、新建として何度も能登に出向いて支援活動をしていることはいうまでもないことである。

3. 視察・懇談先の概要

主催；災対連

日時；25年5月15、16日(木、金)

参加者；

- ・災対連の各位、
- ・新建全国；8人
- ・新建富山；4人

訪問先(図1)；主に輪島市門前

- ・七浦(しっら)；七浦地区再生会議で談話
地域の状況と被災木造建物復興視察
仮設住宅視察
- ・輪島市堀町；輪島診療所での懇談、
周辺被災現場視察
- ・大沢；漁港復興、棚田復興

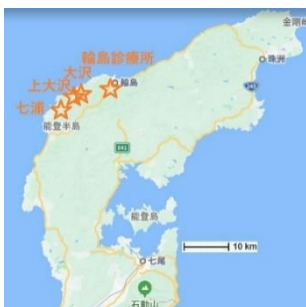
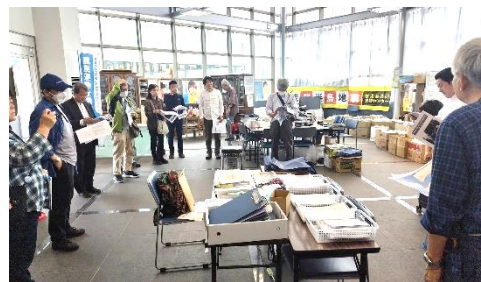


図1 奥能登地図 yahoo 地図より

- ・上大沢一帯；山間地一帯の斜面崩壊
- ・内灘一帯；荒谷小学校、内灘一帯液状化現場
- ・災対連被災者共同支援センター(羽咋)；打合せ(写1)



写1 支援センターにて打合せ；
左奥は富山メンバー、中央は新建全国、手前は災対連各位

4. 七浦

(1)七浦；七浦は輪島門前町に吸収される前までは七浦村として存続し、高度成長期前までは農業・漁業が盛んであったが、その後時代を下るに従い、過疎化が進み、人口200人程の地域となり、そのほとんどが高齢者である。当地域は、豪雨に関しては目立ったものはなかったが、地震では陸地の隆起などを始めダメージが大きかった。今でも被災家屋の解体で重機が稼働している。

(2)七浦地区再生会議

高齢化が進み人口減の過疎の村「七浦」を何とかしなくてはとの想いで、地元高齢者が中心になり、村で唯一の若い女性住民も入って再生会議が設立され、災対連の支援をも受けて再生活動が進められている。

会の活動の基本は「家屋の再生」、「コミュニティの設置」、「復興ジェオパークづくり」であり、家屋の再生として、シェアハウス、オーベルジュ、復興住宅として活用する改修が計画されている。また事業を推進するために、社団法人化を検討しているとのこと。

今回の懇談では、高齢化や若者流出・住民他地域移住の実情を踏まえて、人が集まる魅力づくりをどう図っていくかが論議された。



写2 再生会議
上：熱い議論
下：会場(公民館、
校舎利用)



(3)七浦(皆月海岸)域；地域一帯の被害について、全壊無し、半壊・一部損壊有り。無傷の建物は明治期に建てられた伝統工法によるものであり、内部構造体について性能の議論をした。一部損壊家屋については損傷の度について、また軽微な被害

の家屋には修復の方法について議論した。なお、特に際立った視察判断では、一部損壊はもちろんの事、半壊でも修理は可能であり、安易に取り壊すこと慎むべきであるとのこと。住民にとっては実に頼もしい診断であった。



写3 無被害の
伝統木造家屋
左；室内、右；外観



写4 一部損壊
宿泊所に再生
上；修復待ち
下；浸水泥をか
き出し

5. 七浦仮設住宅

七浦には七浦第一団地があり、被災者の方々は元気に暮らしておられ、突然訪問の我らと談笑に華が咲いた。買い物については、当該場所が



写5 仮設
広々とし
た仮設団地



中山間であるために、門前まで車で出向くとのことであった。

6. 輪島診療所；

(1)被害状況；輪島市街地の南端に位置する堀町にある診療所においては、診療所そのものは、地震と水害にはびくともしなかったが、周辺地域では被害があった。地震でも大きなダメージのあったところへの追い打ちは水害であった。付近には河原田川の支流が流れている。川原田川やその支流も氾濫して一帯は水害を被った。

(2)診療所；ここに病院関係者2名に利用者(患者)代表2名が加わり、診療機能について懇談した。

- ・診療所職員半分の方も自宅が被災しており、診療所の運営は大変である。

- ・周辺住民の利用者については、今では8割ほどが戻ってきている。残りの二割は二重被災のため当地を離れて金沢市などに移転されるという。とにかく利用者減については、今後の永続的な診療業務と大いに関係している。

- ・それだけでなく、近年の診療報酬の改定があったので、診療所もそのあおりで苦しい状況が続いている。

- ・なお、農業代表の方との懇談については次章で。



写6 輪島診療所
左；外観、無被害
下；運営者、利用
者との懇談



7. 農地復興；

農耕地被害を平坦地と山間地の二例を述べる。

(1)平坦地の場合；輪島市街地南側にて

輪島診療所にて、診療所より内陸側に1km・3km離れたところに農地を持つ農家の方々と懇談。その内容は；

- ・水害で田畑が砂や泥で埋まってしまう、それを取り除くのに、重機を複数台使ってやっとのことで、全耕地の半分くらいを整地して、田植えを完了させた。

- ・県などからは畑作でというが、水田と同様、耕

作地を整備確保するのが至難の業である。とにかく、水田を今後とも続けていきたいとのこと。

(2)山間地の場合；大沢にて

門前と輪島の間位置する大沢地域における海に面した里山傾斜地では、輪島市白米町の千枚田のような規模ではないが小規模な棚田において被害があった。当該農耕地では、陸の隆起であっても、斜面域は斜面そのものの変形もあってか、不同隆起となり、水田がわずかに傾斜したために水が貼れなくなったので、これを山側と陸側の二つに分割し、分割域で畔の高さを調節して、分割水田で何とか田植えができたという。



写7 水田復興
左；当該地遠景
下；復興した水田



8. 漁港(大沢)；

港が陸地隆起のため港が干し上がったので、有志で港の一部を浚渫し、小型船専用の船着き場がつくられていた。



写8
船着き場
港が干しあがり、小型船のみ接岸できる船着き場

9. おわりに

視察の全体印象は、地元被災者の思いがかなり深刻であったということである。皆さんの声は「地元の方復興が進まないのは国や県が能登の自然減少(自然消滅)を待っているかのようだ」ときびしさそのものであった。こうした状況においても、今と向き合い将来と向き合う姿勢には、敬服する次第であった。そもそも、(状況は全国どこ

でも一緒であり)能登全域では若者離れ、少子高齢化、人口減、過疎化、といった問題を抱えていたところにダブルパンチを被り、災害復興問題は住民の他地域移住の問題を含め、まさに世直し(健康で文化的な生活確保)のきんきん課題といえる。

謝辞；災対連各位、訪問先の各位、お世話になりました。記して謝意を表します。

付録 1. 視察コース

15日 金沢→内灘一帯→七浦再生会議談義
→七浦一帯→上大沢山間部と棚田
→大沢漁港→金沢

16日 金沢、富山→災対連被災者共同支援センター(羽咋)
→輪島道の駅→輪島診療所、その一帯
→金沢、富山

付録 2. 未だ手つかずの斜面崩壊



能登の山に入ると、地震や水害で樹木がなぎ倒されたり、海岸では大規模な山崩れの多々見られる。



付録 3. 記念は未だ去らず、斜面崩壊の危険

裏山が今にも崩れそうな家屋。



付録 4. 間垣を観光資源に街づくり



浜風を防ぐ防風の間垣。これを基にして民泊や海の観光に繋げたいとのこと。

